

サンプル

遥を探して美術棟の裏手に回ると、木漏れ日の下でデッサンに集中する後ろ姿を見つけた。エプロンを締めて、前髪をピンで留めた無防備な横顔。毛先の髪を少し汚しながら一心不乱に筆を動かす姿を見ると、独占欲がじりじりと騒ぎ出す。

俺はそっと近付いて、細い腰を逃がさないように背後から強く抱き寄せた。

『わっ？！ 茜？ びっくりした〜！』

『抜け出してきた。おまえの色を吸いに来たよ』

驚いて振り返った遥の耳元で、昨日選んであげたピアスが揺れている。それを見つけた瞬間、思わずニヤけてしまった。

『ほら、俺のこと気にしないで描いて？』

そう囁きながら耳元に顔を寄せると、遥は顔を真っ赤にしながら風景画に向き直る。

その仕草がやたら可愛くて、俺は抱きしめたまま左手をエプロンの隙間から忍び込ませた。シャツ越しに指先で、右の突起をゆっくりと撫でる。

『ちょ……ちょっと？！ 茜？！』

『ほら、騒ぐと周りに声聞こえるよ？』

恥ずかしがって慌てる遥が可愛くてどうしようもない。この死角なら二人の様子は誰にも見えない。

俺は指先で優しくそこを撫でながら、わざと少し強めに摘んでみる。

『ん……っ 茜ダメだよ……はぁ……』

漏れる吐息が耳をくすぐる。俺は遥の首筋に唇を寄せ、熱を這わせた。

『気持ちいいでしょ……？』

『ん……』

指先で中心をくるくると回したり弾いたりしていると、遥が息を荒くして、涙目で見上げてくる。

その表情に耐えられなくなって、キスで唇を塞いだ。舌を絡めると、遥が昂っているのがダイレクトに伝わってくる。

深いキスの後、唇を離して問いかける。

『おまえ……本当エロいよな……続きしたい？』

遥は熱に浮かされた顔で、俺の服の裾を軽く引っ張った。

『したい……』

『明日、家くる？ 兄さん仕事でいないんだろ？』

『うん……行く』

素直に頷く遥が可愛くて、俺は満足感に浸りながら、いつまでも後ろから彼を離さなかった。